

お前が、初めて家に貢献できる機会だと思え」

その言葉に、胸の奥が冷たく冷えていくのを感じた。

私と妹のクレアは、異母姉妹だった。魔法の才能に恵まれ、父から溺愛されて育った華やかな妹とは違い、私には何の才能もなく、幼い頃から屋敷の片隅で日陰者のように扱われてきた。今回の婚約も、本来は貴族界で若手有望株と名高いアルフレッド・グランヴェル公爵とクレアのものだったはずだ。しかし、彼が冷酷非情で「氷の公爵」と噂されていることを知った父とクレアは、恐れをなして私を身代わりとして差し出すことを決めたのだった。

「……分かりました、お父様。指示に従います」

私が静かに頷くと、父は安心したように鼻を鳴らし、一瞬の躊躇もなく私を屋敷から追い出すように準備させた。

雨が降りしきる中、用意された簡素な馬車に揺られながら、私は冷え切った自分の手を抱きしめていた。身代わりであることが破綻すれば、即座に処刑されるかもしれない。冷酷だと噂される公爵様に嫌われ、冷たい離れに押し込められたとしても、あの冷淡な実家にいるよりはマシなのだろうか。期待など何一つ持たず、ただ与えら

れた運命を受け入れる覚悟だけを胸に秘め、私はグランヴェル公爵邸の門をくぐったのだった。

第2章：氷の公爵様の、予期せぬ温もり

公爵邸の重厚な扉が開かれた時、私はそのあまりの豪華さに息を呑んだ。しかし、それ以上に私の心を支配したのは、廊下の奥から歩み寄ってくる一人の男性の存在感だった。

アルフレッド・グランヴェル公爵。

闇をそのまま切り取ったかのような漆黒の髪に、凍てつく氷原を思わせる氷青色（アイスブルー）の瞳。刃物のように鋭く整った完璧な容貌を持つ彼は、まさしく人々が恐れる「氷の公爵」そのものの威厳を纏っていた。彼の鋭い視線が私に注がれた瞬間、私は全身の血が引いていくような緊張感を覚え、その場に深く頭を下げた。

「……よく来てくれた、フォレスト伯爵令嬢」

彼の低く冷やかな声が響く。私は震える声で、「ルチ……いいえ、クレア・フォレストと申します」と偽りの名前を口にしかけ、恐怖で声が詰まった。

しかし、アルフレッド様は私を見下ろすと、不意に眉をひそめた。

「濡れているじゃないか。こんな冷たい雨の中を、ろくな羽織ものもなく馬車に乗せられてきたのか？執事、今すぐ暖炉に火を焚き、温かい飲み物を用意しろ」

彼は脱ぎ捨てた自身の厚手のコートを私の肩へとそっと掛け、戸惑う私を抱き上げるようにして温かい応接室へと誘った。コートから漂う上質なウッディの香りと彼の体温が、冷え切っていた私の身体を優しく包み込んでいく。

「あの.....公爵様.....私は.....」

「アルフレッドでいい。それと.....無理をして笑おうとしなくていい。お前がどんな境遇で過ごしてきたか、その痩せた肩を見れば大体の察しはつく。今日からこの屋敷はお前の家だ。誰に遠慮する必要もない」

アルフレッド様は私の前に温かい紅茶を置くと、大きくて温かい手で私の小さく強張った手を包み込んだ。その手触りはあまりにも優しく、冷酷な噂とはあまりにもかけ離れていた。

「お前を、決して不幸にはさせない。私を信じてほしい」

氷青色の瞳の奥に宿る、深く温かい熱量に触れ、私の胸の奥で何かが静かに解け始めていくのを感じていた。けれど同時に、「私は身代わりの偽者なのだ」という強い罪悪感が、重い鎖のように私の心に突き刺さっていたのだった。

第3章：過保護な日常と、募る罪悪感

グランヴェル公爵邸での生活は、私の想像とは全く異なるものだった。冷たい離れに押し込められるどころか、日当たりの良い豪華な主寝室を与えられ、毎日のように美しいドレスや宝石が用意された。

それ以上に驚いたのは、アルフレッド様の徹底した過保護ぶりだった。

「ルチア……いや、クレア。今日の体調はどうだ？ スープの温度は熱すぎないか？」

朝食の席で、アルフレッド様はわざわざ私の隣に腰掛け、手ずから料理を私の小皿へと取り分けてくれる。彼が多忙な公務の合間を縫って必ず一緒に食事を摂ろうとすること、私が少しでも困った顔をするるとすぐに手を差し伸べてくれることに、メイドたちも温かい微

笑みを浮かべていた。

「アルフレッド様、私は自分でできます……。そんなに甘やかしていただいては、恐縮してしまいます」

「甘やかしているつもりはない。愛しい妻に尽くすのは当然のことだ。お前が『美味しい』と笑ってくれるだけで、私はどんな仕事の疲れも吹き飛ぶのだから」

そう言って、アルフレッド様は私の髪を慈しむように優しく撫でた。彼の指先が肌に触れるたび、私の胸は甘く疼き、跳ね上がるような鼓動を抑えられなくなる。

(こんなに優しくしてもらえるのは、私が『クレア』だからなのだろうか。もし、私が才能のない、捨てられたルチアだと知られたら、この温もりもすべて消え去ってしまうのだろうか……)

彼に惹かれれば惹かれるほど、偽りの自分を演じ続けている罪悪感が私を苦しめた。彼の注いでくれる純粋で深い愛を受け止める資格が自分にはないのだと思うと、胸が張り裂けそうなほど痛む。それでも、彼の差し出してくれる温かい手を取らずにはられない自分がいたのだった。

第4章：解けていく衣装と、許されぬ愛撫

付き合い始めて一ヶ月が経ったある夜。アルフレッド様が公務を終えて私室へと戻ってきた時、部屋には静かな夜の気配が満ちていた。

「遅くなってすまない、ルチア。……起きて待っていてくれたのか」

「はい、アルフレッド様のお顔を見たくて……」

私の言葉に、アルフレッド様の表情がふわりと和らいだ。彼はゆっくりと私に歩み寄ると、ソファに座る私の前にひざまずき、私の手を両手で包み込んで愛おしそうに唇を寄せた。

「お前は本当に可愛いな。……今夜は、お前を私だけのものとして抱いてもいいだろうか」

彼の氷青色の瞳が濃い熱を運び、私を捉える。その眼差しに見つめられるだけで、私の身体は熱く火照り、拒む言葉などどこにも見当たらなかった。私が恥ずかしさに顔を赤くしながら小さく頷くと、アルフレッド様は私を抱き上げ、大きなベッドへと優しく横たえた。

彼の大きな手が、私のドレスの背中のリボンへと伸びていく。滑ら

かな音を立てて紐が解かれ、ドレスの生地が肌を滑り落ちていくたびに、夜の冷氣と彼の熱い視線が露わになった肌を撫でた。

「アルフレッド様……恥ずかしいです……」

「隠さなくていい。お前のすべてが美しく、私を狂わせるのだから」

アルフレッド様の顔が伏せられ、私の首筋へと温かい唇が落とされた。ちゅ、と湿った音を立てて吸い上げられる感触に、私のお腹の奥がキュンと絞られるような甘い痺れを覚えた。彼の指先が私の胸元の薄い下着を押し下げると、今まで誰にも見せたことのない私の豊満な胸が露わになった。

「あ……アルフレッド様……っ」

「ルチア……こんなにも柔らかく、美しい……」

彼の大きな手が私の胸を包み込み、ゆっくりと形を変えるように揉みしだく。先端の硬くなった部分を指先で優しく転がされ、そのまま彼の温かい口腔内へと吸い込まれた瞬間、私の口から情けないほどの甘い悲鳴が漏れ出たのだった。